

宋明思想における人間観

—『論語』下学而上達章の解釈を中心に—

石原伸一

はじめに

孟子曰、仁人心也。義人路也。舎其路而弗由。放其心而不知求。哀哉。人有鶏犬放、則知求之。有放心、而不知求。學問之道無他。求其放心而已矣。（『孟子』告子篇上第一章）

周知の通り、孔子の後継者を自認する孟子は、孔子の「仁」の思想を「仁義」に發展せしめ、「仁義」の失われた「放心」の状態を警戒しながら、同時に學問の必要性を唱えたわけだが、この有名な条について、南宋の朱子（一一三〇～一二〇〇）は以下の注釈を残している。

程子曰、心至重、鶏犬至輕。鶏犬放、則知求之。心放、則不知求。豈愛其至輕、而忘其至重哉。弗思而已矣。愚謂、上兼言仁義、而此下專論求放心者、能求放心、則不違於仁、而義在其中矣。學問之事固非一端。然其道則在於求其放心而已。蓋能如是則志氣清明、義理昭著、而可以上達。不然則昏昧放逸、雖曰從事於學、而終不能有所發明矣。故程

子曰、聖賢千言万語只是欲人將已放之心、約之使反復入身來。自能尋向上去、下学而上達也。此乃孟子開示切要之言。程子又發明之、曲尽其指。學者宜服膺而勿失也。（『孟子集注』卷一三）

筆者は以前この孟子の言葉が宋代時代の人士にどのように活用され、自己の哲学を創出するためにどのように用いられたのかという問題を立て、『孟子』解釈史として、歴代の注釈書を整理した経験を持つが【注一】、今再読してみると、朱子学的解釈の決定版とも言うべき『集注』に、程明道へ一〇三二一〇八五の説「聖賢の千言万語は只是^た人已に放てるの心を^も將て、之れを約し反復して身に入り来たら使^しめんと欲す。自ら能く尋ね^{みづか}向上し去^ゆかば、下学して上達するなり」（『程子遺書』卷一）が引かれていることに注目してしまふ。

朱子学は四書学と呼ばれるほど四書の解釈を通して自己の思想を組み立て且つ正当化し、体系的学問を打ち立てた。当然のことながら、『孟子』解釈はそれだけで独立したのではなく、『論語』『大学』『中庸』の解釈と関連しあっている。事実この程明道の説は、以下の孔子の言葉と重なるものである。

子曰、莫我知也夫。子貢曰、何為其莫知子也。子曰、不怨天、不尤人、下学而上達、知我者其天乎。（『論語』憲問篇 第三十七章）

本稿は、この条の「下学而上達」という語句に着目し、その解釈の正確な読みをたどりながら、宋代時代の人士の人間観の解明を試みるものである。

尚、宋代時代に書かれた四書の注釈書は膨大であり、筆者の調査結果のすべてを紹介することはできないので、宋代は朱子の解釈を中心に、また明代は王学左派の解釈を中心に論じてゆきたい。

朱子の解釈を取り扱う前に、朱子学の形成に多大な影響を与えた北宋の二程兄弟の説をあげたい。文献は朱子が『集注』を作成する過程で、北宋儒者の説を集めた『論語精義』（巻七下）を用いる。

はじめに程明道から。朱子が『精義』に採用した程明道の説は全部で四条ある。一条目から順に列挙してみる。

明道曰はく、下学して上達す、と。意は言の表に在るなり、と。

又た曰はく、下自らして上に達する者は、唯だ造次にも必ず是に於てし、顛沛にも必ず是に於てす、と。

又た曰はく、積氏は唯だ上達を務むるのみにして、下学無し。然らば則ち其の上達する処は、豈に是有らんや。元と相ひ連属せず、但だ間断有るのみなれば、則ち道に非ざるなり、と。

明道曰、下学而上達。意在言表也。（『程氏遺書』巻一一）

又曰、自下而上達者、唯造次必於是、顛沛必於是。

又曰、積氏唯務上達、無下学。然則其上達処、豈有是也。元不相連属、但有間断、則非道也。（『程氏粹言』巻一）
第一条目は、『集注』にも採用された程明道の重要な説である。

第二条目からは工夫論の順序としては下学が上達に先行すること、第三条目からは両者は相い関連するものであり、いきなり「上達」に入る仏教の説は道に悖ることがそれぞれ読み取れる。つまり、工夫（為学）には手順がある、階梯を踏まなくてはならないということである。そして、これら三条の後に冒頭で引いた学問求放心章の解釈「聖賢千言万語只是欲人將已放之心、約之使反復入身来。自能尋向上去、下学而上達也」が置かれている。程明道は心に対する工夫を学の中

心に据えたのである。

弟の程伊川へ一三三（一〇七）は、こうした程明道よりも具体性を帯び、工夫のあり方を説いている。

或るひと曰はく、古への人に教ふるとき、必ず洒掃・応対・進退を先にする、何ぞや、と。曰はく、下学して上達するは、夫婦の愚と雖も以て与に知る可き者にして、其の至るに及びてや、聖人と雖も知らざる所有るなり。今夫れ処に居りては恭、事を執りては敬、衆人は之れを能くすと雖も、然れども彼の聖賢の聖賢為る所以の者も、亦た豈に是れに外れんや。然れども卒に衆人と異なる者、衆人は習ひ致して察かならざるを以て、上達する能はざるのみ。夫れ惟だ終身之れに由りて其の道を知らざるのみ。故に曰はく、人飲食せざる莫きも、能く味を知ること鮮きなり、と。

或曰、古之教人、必先於洒掃応対進退、何也。曰、下学而上達、雖夫婦之愚可以与知者、及其至也、雖聖人有所不知也。今夫居処恭、執事敬、雖衆人能之、然彼聖賢之所以為聖賢者、亦豈外是哉。然卒異於衆人者、以衆人習不致察、不能上達耳。夫惟終身由之而不知其道。故曰、人莫不飲食也、鮮能知味也。

「洒掃応対進退」「居処恭」「執事敬」などは形ある工夫の姿である。「以衆人習不致察、不能上達耳」の発言は、工夫を積み上げて道理を明らかにし続けければ、聖人賢者ではなくても、必ず高い極致に到達するという読み方もできる。人間の可能性を信頼した説とも言える。

しかしながら、朱子の心性論との関連で言えば、次の発言も見逃せない。

伊川曰はく、学ばんとする者は須らく下学して上達するの語を守るべし。乃ち学の要なり。下に人事を学めば、便ち是れ上に天理に達す、と。

又た曰はく、天を怨みず、人を尤めず、と。理に在りては当に此くの如くあるべし、と。

須らく是れ内外の道を合し、天人を一とし、上下を齊しくし、下学して上達すべし。高明を極めて中庸に道る。

伊川曰、学者須守下学上達之語。乃学之要。下学人事、便是上達天理。（『程氏遺書』卷二上）

又曰、不怨天、不尤人。在理当如此。（『程氏外書』卷二）

須是合内外之道、一天人、齐上下、下学而上達。極高明而道中庸。（『程氏遺書』卷三）

最初の一条は、前掲した程明道の説とともに『集注』に採用された。学問の要諦である。

朱子学における心性論の中核は、「理」である。理を説いた二条目も『集注』に採られた。論語本文で「天」の言及がある以上、天人合一の流れになるのは自然なことである。「下学」人事、「上達」天理の区分けをしながらも、両者をつなぐものはやはり理である。最後の条も天人の合一に触れ、道徳実践として高明を極めてゆきながら「中庸」の徳に依拠することを述べる。この条に関しては、朱子はなぜか『精義』の採用すら見送った。

以上、二程兄弟の説をあげたが、朱子は「程子至、宜深味之」（『或問』）と賞賛している。一方、こうした評価と対照的に手厳しい非難、「其過益甚、与夫子之意相反」（同上）を浴びたのは謝良佐（一〇五〇〜一一〇三）であった。『精義』所引の説をあげる。

謝曰はく、天人・物我・上下、本と二理無し。天を怨みざれば、則ち天と一に為りて怨む可く無し。人を尤めざれば、則ち人と一に為りて尤む可く無し。下学して上達すれば、則ち上下は一なり。此くの如くんば、則ち人我を知らずと雖も、我其れ自ら知る。我天と一に為る。之れを天知ると謂ふも亦た可なり、と。

或るひと儒仏の弁を問ふ。曰はく、吾が儒は下学し上達し、理を窮むることの至り、自然に道と天とを一と為すことを見す。故に孔子曰はく、我を知る者は其れ天か、と。天を以て我と為すなり。仏氏は理に従ひ来たらず、故に自

ら信ぜず。必ず人の証明するを待ちて後に信ず、と。

又た曰はく、学は須らく先づ理の上に従り学び、人の理を尽くし、斯に天の理を尽くし、学は斯に達すべし。下学して上達す、と。其の意は此くの如し。故に曰はく、我を知る者は其れ天か、と。

謝曰、天人物我上下、本無二理。不怨天、則与天為一無可怨。不尤人、則与人為一無可尤。下学而上達、則上一矣。如此、則人雖不我知、我其自知矣、我与天為一。謂之天知亦可。

或問儒仏之弁。曰、吾儒下学上達、窮理之至、自然見道与天為一。故孔子曰、知我者其天乎。以天為我也。仏氏不從理来、故不自信。必待人証明而後信。

又曰、学須先從理上学、尽人之理、斯尽天之理、学斯達矣。下学而上達。其意如此。故曰、知我者其天乎。〔『上祭語録』卷二〕

仏教の説に経書解釈を通して意義を唱えるのは儒教の常套手段であり、事実程明道の説にも下学を無視して上達に進む仏教の説が非難されていた。この資料によれば、謝良佐も仏教を攻撃し、なおかつ「我与天為一」と一体化を説いている。だが、朱子は謝良佐の「下学〓人理」「上達〓天理」という点に納得ができなかったのである。この謝良佐に対する批判については、次節で朱子の解釈を考察するときに再度取りあげたい。

(11)

それでは、以上の北宋儒者の諸説を踏まえて、朱子自身はどのような解釈を打ち立てたかである。

最初に『集注』の補完的書物とも言うべき『論語或問』（卷一四）に載る朱子の発言を追つてみたい。

朱子は「下学而上達」を身近な自己修養、その果てには天（天理）との一致があると見なした。

或るひと問ふ、怨みず尤めず、下学し上達す、何を以て人は之れを知ること莫くして、天は遍く之れを知るか、と。

曰はく、其れ怨みず尤めざれば、則ち之れを人に責めずして之れを己に責む。其れ下に人事を学べば、則ち又た之れを遠きに求めずして之れを近きに求む。此れ固より人に与すること無くして、俗に駭せられず。人も亦た何ぞ自らして之れを知らんや。其の上達に及びて天と一に為れば、則ち又た人の及び知る所の者に非ざるも、独り天理の相ひ関するに於るに有るのみ。此れ人之れを知る莫くして天独り之れを知る所以なり、と。

或問、不怨不尤、下学上達、何以人莫之知、而天遍知之。曰、其不怨不尤也、則不責之人而責之己。其下学人事也、則又不求之遠而求之近。此固無与於人、而不駭於俗矣。人亦何自而知之耶。及其上達而与天為一焉、則又有非人之所及知者、而独於天理之相関耳。此所以人莫之知而天独知之也。

学の主体は自己であり、大事なものは近くにある、これは『論語』頻出の修養論である。朱子はこの修養論をベースに理の世界を理論的に構築してゆく。同じく『或問』から引く。謝良佐批判にも言及している。

曰はく、下学して上達する者は、始めは下に学びて、之れを上達に卒ふるを言ふのみ。今程子は以為へらく、下に人事を学べば便ち是れ上に天理に達す、と。何ぞや、と。曰はく、学ばんとする者は夫の人事、形而下なる者を学ぶ。而るに其れ事の理は、則ち固より天の理なり、形而上なる者なり。是の事を学びて其の理に通ずれば、即ち夫の形而下なる者にして、其の形而上なる者を得たり。天理に達するに非ずして何ぞや、と。曰はく、然らば則ち謝氏の以て下学は人の理、上達は天の理と為す者は、如何、と。曰はく、既に理と曰はば、則ち天人の異なること無く、其の此

に学ぶを待たずして彼に通ずるなり、と。

曰、下学而上達者、言始也下学、而卒之上達云爾。今程子以為下学人事便是上達天理、何耶。曰、学者学夫人事形而下者。而其事之理、則固天之理也、形而上者也。学是事而通其理、即夫形而下者、而得其形而上者焉。非達天理而何哉。曰、然則謝氏以為下学人理、上達天理者、如何。曰、既曰理矣、則無天人之異、不待其学於此而通於彼也。

この問答は程伊川の理に関する質問から入っている。朱子は「下学〓人事〓形而下」と「上達〓天理〓形而上」との兩者を對比させながら、形而下にある事の理を学べば、その結果として形而上の理に達すると解釈する。両者は表裏一体、理の一致である。朱子は程伊川の「下学人事便是上達天理」の説を掘り下げたのである。また、謝良佐の「下学〓人理」
「下学〓人理」の解釈を朱子が批判したのは、上下分断、理の分断を招く危険性を孕んでいると考えたからであった。

この「下学而上達」章は朱子教団においても活発に議論が交わされた。（『朱子語類』卷四四）
問ふ、天を怨みず、人を尤めず、下学して上達す。我を知る者は其れ天か、と。知とは、恐らくは是れ天と契合す、是れ真の個の知覚に有らざるや否や、と。先生曰はく、又た知覚の似く、又た知覚の似くならず、這裏も也た説き難し。天を怨みず、人を尤めず、と。聖人は都な己と相ひ干せず。聖人は只是だ下学を理会して、自然に上達するのみ。下学は是れ只だ這裏にのみ立脚し在りて、上達は是れ見識の自然に超え詣る。到り得て後來、上達は便ち只是だこの下学なり。元と相ひ離れず。下学とは、下に此の事を学び、上達とは、上に此の理に達す、と。問ふ、聖人も亦た下学有り、如何、と。曰はく、聖人は是れ生知と雖も、亦た何ぞ嘗て学ばざる。太廟に入りては、事毎に問ふ、吾十有五にして学に志すの如きは、便ち是れ学なり、と。

問、不怨天、不尤人、下学而到達。知我者其天乎。知、恐是与天契合、不是真有個知覺否。先生曰、又似知覺、又不似知覺。這裏又難說。不怨天、不尤人。聖人都不与己相干。聖人只是理会下学、而自然上達。下学是立脚只在這裏、上達是見識自然超詣。到得後來、上達便只是這下学。元不相離。下学者、下学此事、上達者、上達此理。問、聖人亦有下学、如何。曰、聖人雖是生知、亦何嘗不学。如入太廟、每事問、吾十有五而志於学、便是学也。（董
錄）

天との契合という説は、朱子学系統の注釈書に見られる解釈である。聖人として下学から入るのである。「入太廟、每事問」（『論語』八佾）これは具体的な下学の中身である。この下学の先に「理」がある。上達とは下学を積む修行者が天の理に到達するという事。だが、下学とは聖人として行わなくてはならない修行である。

『語類』には「下学」「上達」を簡潔に説明している条も並ぶ。

下学上達は是れ二事と雖も、只是だ一の理のみ。若し下学し得て透らば、上達は便ち這裏に在り。

下学上達は雖二事、只是一理。若下学得透、上達便在這裏。（楊道夫録）

下学とは、事なり。上達とは、理なり。理は只だ事の中に在り。若し真に能く下学の事を尽し得れば、則ち上達の理は此に在り。

下学者、事也。上達者、理也。理只在事中。若真能尽得下学之事、則上達之理在此。（同上）

下学は只是だ事のみ、上達は便ち是れ理なり。下学上達は只だ事物の上に於て理を見る要し。邪正是非をして各、其の弁有ら使む。若し仔細に省察するに非ざれば、則ち所謂る理なる者は、何れ従りして之れを見ん。

下学只是事、上達便是理。下学上達只要於事物上見理。使邪正是非各有其弁。若非仔細省察、則所謂理者、何従

而見之。(周謨録)

下学と上達は二つの事項ながら、理という点では一致する。下学という事物を通した工夫の果てに事物の理に達する。ここに下学から上達へと連続性を見るわけである。そして、この理は是非善惡の区分けになる以上、修行者はじっくりと観察する必要が求められる。ここでも程伊川の説いた「理」を工夫においてどのような位置づけになるかを朱子は詳解している。事物の理には留意したいところ。『或問』には事の理とあった。心の理ではないのである。

『語類』の次の問答にも目を向けたい。

道理の都みな我に在る時は是れ上達なり。譬如たとへば字を写すに、初めに習ふ時は是れ下学なり。写し得て熟するに及び、一点一画都な法度に合ふは、是れ上達なり。

道理都在我時は上達。譬如写字、初習時は下学。及写得熟、一点一画都合法度、是上達。(周明作録)

下学して上達すを問ふ。曰はく、学の至りは、即ち能く上達す。但だ力を著す、力を著せざるを看るのみ。十五にして学に志すは、下学なり。能く立つは、則ち是れ上達なり。又たみづか自ら立ちて学び、能く惑はざれば、則ち上達なり。層層級級として達し將もちて去ゆけば、自然に日に高明に進む、と。

問、下学上達。曰、学之至、即能上達。但看著力不著力。十五而志乎学、下学也。能立、則是上達矣。又自立而学、能不惑、則上達矣。層層級級達將去、自然日進乎高明。(張洽録)

下学からスタートし階梯に沿って積み上げた結果、一步一步「熟」して行く。「層層級級」とは階級を幾重にも重ねてゆくことである。この二条は「理」という哲学的な用語を直接使わずに、例えや論語の言葉を用いて説明しているが、工夫に励む弟子たちにとってもわかりやすいものだったに違いない。ただ、朱子はその一方で思弁的に抽象理論をも組み立

てようとする。次の問答は「形而上」「形而下」というタームを使った例である。

蔡問ふ、一節の上達有り、全体の上達有り、と。曰はく、是れ全体にあらず。只是だ這の一件のみ、理会し得て透り、那の一件も又た理会し得て透り、積み累ぬること多ければ、便ち会ず貫通せん。是れ別に一箇の大なる上達有るにあらず、又た是れ下学の中に便ち上達有るにもあらず。是の下学を須ちて、方めて能く上達す。今の学ばんとする者は下学に於て便ち玄妙を要求むるは、則ち不可なり。灑掃・応対、此に従りて形而上に到る可し。未だせずんば便ち是れ形而上ならんや、と。

蔡問、有一節之上達、有全体之上達。曰、不是全体。只是這一件理会得透、那一件又理会得透、積累多、便会貫通。不是別有一箇大底上達、又不是下学中便有上達。須是下学、方能上達。今之学者於下学便要求玄妙、則不可。灑掃・応対、從此可到形而上。未便是形而上。(陳淳録)

形而上というとか神秘的で高遠なものを感じさせるが、何のことはない、一步一步確実に形而下の下学を積み重ねてゆく。そうした日頃の積み重ねこそが形而上に到る道である。このように朱子の『論語』解釈は、經書本文を文字通り読みながらも、それを日頃の工夫に結びつけ、さらには理学という思弁的哲学を構築するという立場を取っているのである。次の資料は、「詩三百、一言以蔽之、曰、思無邪」(『論語』為政)の解釈に「下学而上達」を使ったケース。詩経を読むことが下学の第一歩。着実に習熟しつつ、自然と一貫に到達する。(『朱子語類』卷二三)

若し是れ常人言へば、只だ一箇の思ひに邪無しと道ふのみにして便ち了はる、便ち那の詩三百を略し了はる。聖人は是れ詩三百に従ひ一篇逐に理会し了はるを須ちて、然る後に思ひに邪無きことを理会す、此れ所謂る下学して上達するなり。今人は止だ上達に務むるのみ。自ら下学を免れ得んと要す。灑掃・応対・進退は便ち天道有りと説道くが

如きも、都な去きて那の灑掃・応対・進退の事を做さず。灑掃に到り得れば、則ち灑掃に安ぜず、進退なれば則ち進退に安んぜず、応対なれば則ち対応に安んぜず、那の裏面の曲折に去く處、都な鶻突にて理會無きにて了はる。這箇須らく是れ去き做し、到り得て熟し了はり、自然に貫通すべし。這裏に到りて方めて是れ一貫なり。

若是常人言、只道一箇思無邪便了、便略了那詩三百。聖人須是從詩三百逐一篇理會了、然後理會思無邪、此所謂下學而上達也。今人止務上達。自要免得下學。如說道灑掃應對進退便有天道、都不去做那灑掃應對進退之事。到得灑掃、則不安於灑掃、進退則不安於進退、應對則不安於對應、那裏面曲折去處、都鶻突無理會了。這箇須是去做、到得熟了、自然貫通。到這裏方是一貫。(葉賀孫錄)

それではこのあたりで、『論語集注』を使って朱子の解釈をまとめてみる。

夫子は自ら嘆き、以て子貢の問ひを發するなり。天に得られざるも、天を怨みず。人に合はざるも、人を尤めず。但だ下學して自然に上達するを知るのみ。此れ但だ自ら其れ己に反りて自ら修め、序に循ひて漸く進むを言ふのみ。以て甚だしくは人に異なりて其の知を致すこと無きなり。然れども深く其の語意を味へば、則ち其の中に自ら人の知ることに及ばずして天の独り之れを知るの妙有るを見る。蓋し孔門に在りては惟だ子貢の智のみ幾ど以て此に及ぶに足る。故に特だ語り以て之れを發するのみ。惜しきかな、其れ猶ほ未だ達せざる所有るなり。○程子曰はく、天を怨みず、人を尤めず、と。理に在りては当に此くの如くあるべし、と。又た曰はく、下學して上達す、と。意は言の表に在り、と。又た曰はく、學ばんとする者は須らく下學して上達するの語を守るべし。乃ち学の要なり、と。蓋し凡そ下に人事を學べば、便ち是れ上に天理に達す。然れども習ひて察かならざれば、則ち亦た以て上達すること能はず。

夫子自嘆、以發子貢之問也。不得於天而不怨天。不合於人而不尤人。但知下學而自然上達。此但自言其反己自修、循序漸進耳。無以甚異於人而致其知也。然深味其語意、則見其中自有人不及知而天独知之之妙。蓋在孔門、惟子貢之智幾足以及此。故特語以發之。惜乎、其猶有所未達也。○程子曰、不怨天、不尤人。在理当如此。又曰、下學上達。意在言表。又曰、學者須守下學上達之語。乃學之要。蓋凡下學人事、便是上達天理。然習而不察、則亦不能以上達矣。

『集注』本文は、經書を素直に読もうとする立場が読み取れる。階梯に沿って積み重ねる工夫は「循序漸進」という表現に落ち着いた。朱子は子貢の智慧をもつても孔子の真意は理解に到らなかつたと判定している。

圏外では前節で検証した二程子の説（『精義』所引）が採られた。「下學而上達」は學問の眼目である。工夫により天理に到達することは誰しも可能である。だが、「習而不察」実際には挫折ししまうのが厳しい現実である。

以上、朱子学的解釈を考察してきたが、「下學而上達」という語そのものは、「下學して上達す」という文字通りの訓読が解釈の基本となっている。朱子はこの素直な読みを工夫論として活用する一方、理の思想をこの解釈に盛り込んだ。『集注』にはそのことが簡潔に整理されている。

(三)

朱子学的解釈に対抗する形で出現したのが、陽明学的解釈であった。最初に陽明学の開祖・王陽明（一四七二～一五二八）の説。

上達の工夫を問ふ。先生曰はく、後儒人を教ふるに、纔かに精微に涉れば、便ち謂ふ、上達は未だ当に学ぶべからず、且く下学を説かん、と。是れ下学・上達を分けて二と為すなり。夫れ目の見るを得可く、耳の聞くを得可く、口の言ふを得可く、心の思ふを得可き者は、皆な下学なり。目の見るを得可からず、耳の聞くを得可からず、口の言ふを得可からず、心の思ふを得可からざる者は、上達なり。気の栽培灌漑の如きは、是れ下学なり。日夜の息する所、条達暢茂するに至りては、乃ち是れ上達なり。人安くんぞ能く其の力に預らんや。故に凡そ功を用ふ可く、告語ぐ可き者は皆な下学なり。上達は只だ下学の裏に在り。凡そ聖人の説く所は、精微を極むと雖も、俱に是れ下学なり。学ばんとする者は只だ下学の裏従り功を用ひば、自然に上達し去かん。別に箇の上達の工夫を尋ぬるを必せず、と。

問上達工夫。先生曰、後儒教人、纔涉精微、便謂、上達未当学、且説下学。是分下学上達為二也。夫目可得見、耳可得聞、口可得言、心可得思者、皆下学也。目不可得見、耳不可得聞、口不可得言、心不可得思者、上達也。

如氣之栽培灌漑、是下学也。至於日夜之所息、条達暢茂、乃是上達。人安能預其力哉。故凡可用功、可告語者皆下学。上達只在下学裏。凡聖人所説、雖極精微、俱是下学。学者只従下学裏用功、自然上達去。不必別尋箇上達の工夫。〔『伝習録』上〕

王陽明は「上達」については多くは語らない。なぜならば、「下学」と「上達」とを分断すること自体を認めず、下学を感覚の及ぶ範囲に限定するからである。したがって、上達の工夫ということはありません。「上達只在下学裏」、「凡聖人所説、雖極精微、俱是下学」と、下学と上達との融合が顕著になっている。

続いて、王陽明の高弟である王畿（一四九八～一五八二）の説。

上達は只だ下学の中に在るのみ。口の言ふ可く、力の致す可く、心思の及ぶ可きは、至りて極精極微と雖も、皆な下

学の事なり。口の言ふ能はざる所、力の致す能はざる所、心思の及ぶ能はざる所、之れを上達と謂ふ。石居の、天徳王道とは陰陽の迭たがひに運びて其の神なるを知る莫きことを引きて証と為すは、切ならざるが似ごとし。其の惟これ天の命あ於あ穆うるほしきこと曰たまはず、と曰ふは、夫子の上達なり。四時行はれ百物生ずるは、夫子の下学なり。故に曰はく、我を知る者は天か、と。亦た是れ四時百物は即ち天命の在る所なり。顕微へんたに間無まきの義なり。

上達只在下学中。口之可言、力之可致、心思之可及、雖至極精極微、皆下学事。口之不能言、力之不能致、心思之所能及、謂之上達。石居引天徳王道陰陽迭運莫知其神為証、似不切。其曰惟天之命於穆不已、夫子之上達也。四時行焉、百物生焉、夫子之下学也。故曰知我者其天乎。亦是四時百物即天命所在。顕微無間之義。（『龍

溪王先生全集』卷三）

冒頭に「上達只下学中」と両者の關係を明らかにしている。そして、下学を知覚できる範囲に限る。聖人の「下学而上達」は衆人の知覚どころの次元ではなく、自然や天命そのものの中にある。その結果「我を知る者は其れ天か」になるわけである。王陽明は下学と上達とは融合的であるが故に、上達を語らなかつたが、王幾は王陽明の説を一步進めて、聖人の下学上達にまで踏み込んだ発言をしている。

明代後期、陽明学の隆盛にともない、心学的解釈の四書注釈書が多数残されることになった。その中より主だったものを順次あげてゆきたい。袁黄（一五三三～一六〇六）の説。

蓋し夫子の文章は聞く可べくして性道は識り難し。故に我を知る莫しと言ふ。子貢は平生みづか自ら謂おもへらく、智以て聖人を知る者に足る、と。忽たち其の知る莫きの嘆きを聞けば、則ち平日の知る所の者は、皆な其れ真に非ず。故に何為れぞ知る莫きの問ひ有り。夫子の答は全く是れ性と天道とを以て子貢に示す。下学する処は以て人に異なる無くして、

上達する処は則ち人の知ることには及ばずして、天独り之れを知る。此の処は全く上達に重ぬ。

蓋夫子之文章可聞而性道難識。故言莫我知。子貢平生自謂、智足以知聖人者。忽聞其莫知之嘆、則平日之所知者、皆非其真矣。故有何為莫知之問。夫子之答全是性與天道示子貢。下学処無以異于人、而上達処則人不及知、而天独知之。此処全重上達。（『四書刪正』卷六）

「子貢曰、夫子之文章、可得而聞也。夫子之言性與天道、不可得而聞也」（『論語』公治長）を根拠に、聖人の前では子貢の聰明の智すら取るに足らぬがごときである。聖人の知とは常人の理解を越えた上達の領域という意味であろう。正しく天のみぞ知るのである。

続いては、袁宏道へ一五六八〜一六一〇の説。

袁中郎曰はく、子貢の学は都な外面の聞見の上に在りて工夫を做して心の上の一貫の妙を知らず。故に吾が心の理は即ち天人の理にて、吾惟だ求めて以て天に合し求めて以て人に尽くして、此の下学の中に就きて上下天人の融り貫かざる無く、其れ下学を悟りて以て天に達す可きを欲することを言ふ。而して耳目見聞に知るを求むるは、会ず之れを吾が心の独り契する所を之れ得ると為すには如かざるなり、と。

袁中郎曰、子貢之学都在外面聞見上做工夫而不知心上一貫之妙。故言吾心之理即天人之理、吾惟求以合天求以尽人、而就此下学中上下天人無不融貫、欲其悟下学可以達天。而求知于耳目見聞、会不如求之吾心所独契之為得也。（『皇明百万家問答』下論卷九所引）

子貢の学は所詮知覚の及ぶ形式的な下学にすぎなかった。学の急所は心の理である。この心の理が天の理と連なる一貫の極致、そこには下達と上達との境界も消えてしまう。心を限りなく強調した解釈である。

次の下学上達のとらえ方も心学的立場がよくあらわれている。袁士瑜〈号、七澤。？？？〉の説。

蓋し当時は道術を談じ、未だ嘗て上達を貴ばざるにあらざるも、之れを高遠に索め、之れを苟難に求むるは、其の未だ嘗て天を知らざるを以てのみ。孔子は縁に随ひ運に任せ、衣を着、飯を喫し、也た天を怨みず、也た人を尤めず。

世に謂ふ、此れ尋常なる下学のみ、と。即ち是れ上達なることを知らざるなり。所謂る神通並び妙用、運水及び搬柴、此の義は愈々浅く愈々深し。

蓋當時談道術、未嘗不貴上達、而索之高遠、求之苟難、以其未嘗知天耳。孔子随缘任運、着衣喫飯、也不怨天、也不尤人。世謂、此尋常下学耳。不知即是上達也。所謂神通並妙用、運水及搬柴、此義愈浅愈深。〔『論語義府』

卷一四所引

世間で言われている下学とは聖人の上達に他ならぬ。「所謂神通並妙用、運水及搬柴、此義愈浅愈深」これは理屈ではない。袁宏道の言説にあつた「心の上の一貫の妙」とも言うべきか。禅味の濃い内容となっている。

心学的解釈の正当性は、理学的解釈の否定という形でも表明された。周延儒〈字、玉繩。号、挹齋。一六一三進士〉の説。

問ふ、我を知るは其れ天かの天の字は、穹蒼の天と作し説く者有り。天の字を把て理の字と作し、天とは理のみと謂ふ有り。二説は是なるや否や、と。周玉繩曰はく、皆な非なり。我を知るは其れ天かとは、只是だ下学し上達するを言ふのみ。吾が心は愧じず作じず、天に当たりて違ひ背き相ひ通ぜざるの意無きを覚ゆ。此れ所謂る天の我を知るなり。穹蒼の天と作すが若きは我を知るを以て大いに通ぜず。亦た天の字を把て理の字と作し解く者も俱に本旨に非ず。必ず須らく聖人自家らの心の上に就きて言ふべし、と。

問知我其天天字、有作穹蒼之天說者。有把天字作理字、謂天者理而已矣。二說是否。周玉繩曰、皆非。知我其天、言只是下學上達。吾心不愧不作、覺有當于天而無違背不通之意。此所謂天之知我也。若穹蒼之天有以知我大不同。亦把天字作理字解者俱非本旨。必須就聖人自家心上言。（『皇明百千家問答』下論卷九所引）

「有作穹蒼之天說者」とは、『集注』系統の注釈書である林希元（一五一七進士）の『四書存疑』（論語憲問）の説であるが、理を立てる朱子学的解釈は否定される。下學して上達した結果、心が恥じない状態になり天と通じ合う、これが「天之知我」の意味である。心学者は「必須就聖人自家心上言」やはり「心」なのである。

朱子学を批判した、心学的解釈をもう一例引く。鄧以讚（字、汝徳。号、定宇。一五七二—一五九九）の説。

子貢は平日知を外に求む。曾て心体上従り功を用ゐず。我を知る莫きの嘆きは、分明らかに是れ他を喚び醒まし、之れを己に求め使めんと欲し、独り知る所の妙なり。怨みず尤めずとは、正しく是れ心体に累ひ無く、自家一段の独り其の妙なる処を見る有り。夫子は意謂らく、我曾て人の耳目の見る所の処従り知を討ねず。只だ心体上従り打ち得て空淨し累ひ無し。每每下學の処に於て便ち上達の妙有り、上達は正しく是れ心中に妙悟る処にて、後章の所謂の一貫是れなり。我を知るは其れ天なりとは、猶ほ天と默契すと云ふがごときのみ。人の知るは便ち見る可き、聞く可き有り。天の知るは何ぞ曾て見聞の言ふ可き有らん。此れ正しく是れ人の知るに及ばざるの妙なり、と。程子亦た云ふ、下に人事を学べば、便ち是れ上に天理に達す、と。然れども習ひて察かならざれば、則ち亦た以て上に達する能はず、と。却て甚だ分けて曉れり。考亭曰はく、序に循ひ漸く進む、と。聖人の一貫の学に非ざるなり。

子貢平日求知于外。不曾従心体上用功。莫我知之嘆、分明是喚醒他、欲使求之己、所独知之妙也。不怨不尤、正是心体無累、自家有一段独見其妙処。夫子意謂、我不曾従人耳目所見処討知。只従心体上打得空淨無累。每每於

下学処便有上達之妙。上達正是心中妙悟處、後章所謂一貫是也。知我其天、猶云与天默契耳。人知便有可見可聞。天知何曾有見聞可言。此正是人不及知之妙。程子亦云、下学人事、便是上達天理。然習而不察、則亦不能以上達。却甚分曉。考亭曰、循序漸進。非聖人一貫之学矣。〔《四書新説国朝名公啓問》下論卷一〇所引〕

心の立場を限りなく重視してゆくと天に到る。これは知覚範圍が及ばないどころではない、悟りの極地一貫である。朱子学は一貫に反する。朱子学の階梯を重んじた学問修養は、支離分裂である。

結びに、葛寅亮へ一六〇一進士の説。学ぶことが天の世界への創造（無声無臭之天蔵）につながっている。

夫子の説く我を知る莫きとは、是れ他の心下に、自ら独り知るの契りの在る所有り、人の曉り得る没し。故に此れがために嘆き、以て子貢の問ひを發せしむ。天を怨みず人を尤めず従り説き下学に到る者は、凡そ学ばんとする者、怨み尤むの念打ち過ぎざれば、必ず闇に於て力を修め着く能はざるなり。下学は乃ち高明に在らずして、卑下なる処、日用常行の中にて、躬に反り己に切なる学問を做す。上は即ち天を指す。近きに繇ひ自ら功夫に徹し、無声無臭の天蔵に徹す。達とは此に足り彼に通ず。下学做し得て尽せば、自然に上に通徹し去く。火を拳ぐる者は、但だ下面に薪を加ふれば、則ち火は自ら上炎するが如し。此れ即ち夫子の天命時事を知るなり。

夫子説莫我知、是他心下自有独知之契所在、没人曉得。故為此嘆、以發子貢之問。從不怨天不尤人說到下学者、凡学者怨尤之念打不過、必不能於闇修着力也。下学乃不在高明、而在卑下處、於日用常行之中、做反躬切己的学問。上即指天。繇近自徹功夫、徹無声無臭之天蔵。達者足此通彼。下学做得尽、自然通徹上去。如拳火者、但下面加薪則火自上炎。此即夫子知天命時事也。〔《論語湖南講》卷三〕

中国近世思想史において、朱子学（理学）と陽明学（心学）とは双壁である。したがって、解釈史を通して思想史を語るるときにも、両者の抗争になるのが自然の流れとなる。冒頭で触れたことであるが、筆者が『論語』『下学而上達』章の注釈書の調査を始めるきっかけとなったのが、『孟子』『学問求放心』章の解釈史を考察したときだった。詳細は拙稿に譲るとして〔注〕参照——理を重視しながら、心のために学問を尊ぶ理学的解釈と「求放心」を「求心」と読み替え心そのものを学問の対象とする心学的解釈、両者のせめぎ合いの中で宋代明代の思想史が綴られる——この流れは『論語』下学而上達章でも同じことが言えそうである。

確認するが、両者の最も大きな解釈の差異は、朱子学的解釈が下学を事の理を窮める、上達を理に達するとしたのに対し、陽明学的解釈が下学における心の理を重宝し、上達を悟りの極致——正しくそれは禪の頓悟を彷彿させるような——、下学と上達との融合を唱えた点にある。確かに朱子にも「下学上達は雖二事、只是一理。若下学得透、上達便在這裏」（『語類』前掲）と、下学と上達とを切り離すことに抵抗感があった。しかし、理を立てたがゆえに二事が残ってしまった。「下学」という現実の工夫と「上達」という理想の達成とは、重なり合いながらも、最後まで線引きが消えなかったのである。朱子は理を分断するとして謝良佐の説を糾弾したが、朱子とて完全合致には至らなかった。だが、線引きがあったからこそ、朱子は理という目標を掲げ、階梯に基づく学問論を解釈としてまとめ上げられたとも言える。

ところで、筆者が注釈書の調査を進めるに当たり、一つ意外なことがあった。拙稿でも指摘したことだが、双壁同士の抗争の根底には、心をめぐる立場の違いがあった。だから、冒頭に掲げた程明道の説「聖賢千言万語只是欲人将已放之心、

約之使反復入身来。自能尋向上去、下学而到達也」も心に関する思索、宋代における心性論の確立の過程で、朱子によって『集注』に採用されたと見なすべきである。その意味で、「下学而到達」も心性論を絡めれば、いくらでも敷衍はできただけである。とりわけ、朱子の心性論の大前提となつた孟子の性善説の議論が再燃することを筆者は期待していた。ところが、調査の結果この章に性善説を関連させた解釈は、ほぼ皆無であつた。【注二】前述した『集注』の内容は、明らかに心性論の議論が抑えられている。

なぜ、そのような結果になつたのか。このことは『集注』を扱う時に、注意しなければならないことであるが、朱子は『集注』を綴る時にその解釈態度は実に慎重である。経書のある条が、朱子教団の中で抽象的な哲学的議論に発展するところがあつても、『集注』には触れられていないことが多く、『集注』に採用される場合は、圏外に採られる、「愚按」という謙虚な筆使いで扱われる場合が多い。それは、朱子以降の朱子学的解釈に対する評価はともかくとして、朱子の胸中には「四書を素直に読む」という認識があつたからではないか。四書はそれだけ貴重な書物であつたわけである。

ただ、そうした朱子の一般論としてのスタンスは別として、解釈に際して心性論が抑制されたのは、もう一つ別の理由が考えられる。それは「下学而到達」の経文自体が、下と上が対概念で並べられていて、ベクトルの方向が下から上になっているために、下学から上達へと進んでゆくという読みを容易に読者に予想させる。この文字通りの読みが、階梯を重んじて学ぶという朱子の工夫論と一致し、心性論ではなく、学問論として色彩が強まったわけである。

しかしながら、それでも筆者は一つの疑問を感じる。次の条を読みたい。

問ふ、明道言ふ、下学して上達す、と。意は言の表に在り、と。曰はく、意は言の表に在りとは、如し下学が只是だ
下学のみならば、如何ぞ便ち上達を会んや。自らはれ言語もて形容し得ず。下学上達は是れ兩件の理と雖も、透徹

たる廝合を会得すれば、只だ一件のみ。下学は是れ事なり。上達は是れ理なり。理は事の中に在り、事は理の外に在らず。一物の中、皆な一理を具ふ。那の物の中に就きて箇の理を見得せば、便ち是れ上達なり。大にして之れを化す、之れを聖と謂ひ、聖にして之れを知る可くからざるを之れ神と謂ふが如しと。然れども亦た人倫日用の中を離れず、但ただ人の所謂る学を尽くすこと能はざるを恐るのみ。果たして能く学べば、安くんぞ上達すること能はざる者有らんや。

問、明道言、下学而上達。意在言表。曰、意在言表、如下学只是下学、如何便会上達。自是言語形容不得。下学上達雖是兩件理、会得透徹廝合、只一件。下学是事。上達は理。理在事中、事不在理外。一物之中、皆具一理。就那物中見得箇理、便是上達。如大而化之之謂聖、聖而不可知之之謂神。然亦不離乎人倫日用之中、但恐人不能尽所謂学耳。果能学、安有不能上達者。（『語類』卷四四、徐寓録）

朱子は『集注』圈外に「意在言表」という程明道の説を採用した。この言葉はどのように解釈するべきなのか。何故に『集注』に採用されたのか。『或問』の中にはそれについての記述はない。

また、この徐寓の記録した条を読んでも、後半部分で朱子は理の哲学に基づいて学問の重要性を懸命に唱えているが、この程明道の説に関しては、「自是言語形容不得」と語り、言葉で説明する限界を示しているようにも読める。同じく『語類』卷四四には、

程子曰はく、下学して上達す、意は言の表に在り、と。何ぞや、と。曰はく、其の言以て其の意を知るに因れば、便ち是れ下学し上達す、と。

程子曰、下学上達、意在言表、何也。曰、因其言以知其意、便是下学上達。（陳淳録）

問ふ、意は言の表に在りとは、是れ如何、と。曰はく、此れ亦た説く可くき無し。那の下学し上達するを説けば、便ち

是れ意は言の表に在り了はる、と。

問、意在言表是如何。曰、此亦無可說。說那下學上達、便是意在言表了。(輔廣錄)

という条も残っているのだが、朱子の返答はいずれも歯切れが悪い。【注三】

実はここに朱子の『集注』作成の苦心が潜んでいると筆者は考える。次の黄式三へ一七八九〜一八六二の説を読まれない。

程朱二子は謂へらく、聖人自ら道を悟りて精微なりと言ひ、黙して理と契る、と。之れを申ぶる者は元眇を説き、怨みず尤めずの語に於るも亦た未だ融貫せず：式三謂へらく、元眇の説は、即ち頓悟の由り起くる所なり、と。

程朱二子謂、聖人自言悟道精微、默与理契。申之者說元眇、於不怨不尤之語亦未融貫：式三謂、元眇之說、即頓悟所由起也。(『論語後案』憲問卷一四)

繰り返しになるが、朱子の學問論、工夫論は階梯を重んじ身近なものからコツコツと積み上げてゆくという堅実なものであり、朱子は修行者に対して「理」という最終目標まで明示した。だが、その上がつてゆき達した極致についての説明は、「熟」「自然」「二貫」といった抽象語を使い、具体性に欠けている。朱子は「只是這一件理會得透、那一件又理會得透、積累多、便會貫通」(『語類』前掲)とも語っていたが、どの段階まで積み上げてゆけば貫通するのか、貫通とはいかなる極致なのか、朱子は語ろうとしない。それは体得者(聖人)しかわからないのだろうか。その瞬間はスーと現れるのだろうか。もしそうであるならば、反朱子学の立場からすれば、それは正に禪の頓悟である。黄式三の批判はこの点を突いたのである。

朱子はこの批判をかわすためにも、仏教との違いを強調する。

是の下学を須^まちて、方^{はじ}めて能く上達す。然れども人亦た下学すれども上達すること能はざる者有るは、只^た下学し得て是当ならざるに縁^よる。若^もし下学し得て是当なれば、未だ上達すること能はざる有らず。釈氏は只だ上達を説くのみにして、更に下学を理會せず。然れども下学を理會せずんば、如何ぞ上達せんや。

須是下学、方能上達。然人亦有下学而不上達者、只縁下学得不是当。若下学得是当、未有不能上達。釈氏只説上達、更不理會下学。然不理會下学、如何上達。〔語類〕卷四四、楊道夫録

こうした仏教に対する攻撃は、「釈氏唯務上達、無下学」「仏氏不從理來」（前掲『精義』）と北宋儒者の説にもあった。朱子は上達の前段階としての下学を重視し、下学の内容を力説する。階梯による工夫を積むこと、これが何の前提もなく一気に上達の極致に達する仏教との決定的な違いであり、この工夫を正当化するためにも理は必要不可欠であった。

以上のことを踏まえて、程明道の「意在言表」を再読してみると次のことが予測できる。聖人の心は、「下学而上達」という経書の言葉の中に完結されている。「聖人の真意は言葉の表面に出ている（意は表に在り）」わけだから、修行者は理という大目的に到達する方向性をこの言葉から読み取り、工夫に励むのみである。そして工夫を重ねた結果、理に達したときの極致というのは、理屈では説明ができないことを「意在言表」の四字を用いて朱子は暗示した。つまり「意在言表」は、「経書を読むことは重要な工夫であり、我々は理を立てるが、それは禅とは異なる」という朱子の思想を凝縮したものであったのではなからうか。

思うに「聖人学んで至るべし」は人間の善なる性に絶対の信頼を置いた標語であるが、あくまでも「べし」なのであって「至れり」ではない。それでは頓悟になってしまふ。そこで朱子は「意在言表」で筆を止めたわけである。下学という工夫を積み重ねた結果、上達した、理に至った、聖人になった、というのは悟りである。「至るべし」である以上、現実

の工夫と理想の達成との線引きは残ることになる。この朱子の解釈に忠実に従えば、『論語』本文は「下学して上達せんとす」という訓読になろう。

(茨城高等学校・中学校教諭)

注

【注一】拙稿『孟子』学問求放心章について(『陽明学』第一五号、二松学舎大学陽明学研究所／二〇〇三年)を参照されたい。

【注二】次に挙げる高攀龍(一五六二—一六二六)の説のみであった。「善即生生之易也。有善而後有性。学者不明善。故不知性也。夫善洋洋乎盈眸而是矣。不明此、則耳目心志、一無著落处、其所学者、偽而已矣。然其機竅在於心。人心反復入身来、故能向上尋去、下学而上達也。」(『明儒学案』卷五八「東林学案」所収)

【注三】『論語集注4』(土田健次郎訳注／東洋文庫、二〇一五年)では、「下学上達、意在言表」を「地道に学んで高い境地に達する」の意味は、この語自体からおおのずと出てくる」と口語訳し、「朱子の弟子もこの語の意味を疑問に思っていたようであるが、とにかくこの語の意味を玩味せよということであろう」(二〇〇頁)との解説がある。